
i f 約束 ～もうひとつの物語～

ユカリ☆

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

if 約束 ～もうひとつの物語～

【Nコード】

N3371N

【作者名】

ユカリ☆

【あらすじ】

ー4年：4年経ったら、必ず迎えに来る。だから：待っていて欲しい。ー

そんな身勝手な約束を5年前にした。

そして、夢を叶える為海を渡った。

4年だったはずの約束が1年伸びてしまった。

果たして彼女は：

※このお話は、「約束」のハッピーエンドバージョンのお話になります。

1 (前書き)

「約束」と同じ内容になっています。読まれている方は、飛ばしてください。

1

―4年…4年経ったら、必ず迎えに来る。だから…待っていて欲しい。―

そんな身勝手な約束を5年前にした。

そして、夢を叶える為海を渡った。

4年だったはずの約束。

しかし研究が長引き、帰国が1年延びた。

彼女は果たして、コレを受け取ってくれるだろうか…。

立ち止まり、右手に持っていたリングケースをグッと握り込んだ。忘れられても仕方がない。果たして待っていてくれるのか…。そんな不安も胸に、待ち合わせ場所の桜花公園へ再び歩き出す。

「おい。桜花公園前のカーブで、人が跳ねられたってよ！」

「マジで！男？女？しかし、彼処のカーブは、急だから事故が耐えないよなあ」

「どうも跳ねられたのは、女性らしい」

そんな会話が聞こえた。

…イヤな予感がする。

僕は、桜花公園へ走り出した。

桜花公園は、急な右カーブを曲がって直ぐの所にある公園だ。

曲がりが急なのに、速度を落とさずに曲がる車が多い。

つまり事故が多発する一角だ。

桜花公園の近くまで来ると、事故を聞き付けた野次馬が群がりを作り、様子を見ていた。

僕は何とかその間を潜り抜け、公園の前に出た。

次の瞬間。

ぽとっ。カタッ。

持っていたリングケースが落ちる。

僕の目の前には、公園の入り口に突っ込んだ車とその横には……。その横には彼女が横たわっているのが見えた。

目の前の光景に呆然となる。

（嘘だ：うそだ！うそだうそだ！！）

目を見張り、体が凍りついていく。

何とか彼女の傍に行こうとするが、脚が鉛のように重い。まるで、現実を拒否するかのよう。

「やっと来たあ」

苦しそうな声でそう言った彼女。

（そうだね。僕は、君を随分待たせてしまったね。）

フラフラと彼女の元へ近づく。

僕から涙が流れる。

「」

（やっと、約束を果たせるのに……。お願いだ。誰でも良い、彼女を……彼女を……）

そう思いながら、必死に彼女の名前を呼んだ。

……彼女の瞳からも涙が零れ落ちていた。

（この5年……君を君だけを思い続けて来たんだ！

君との約束があったから、頑張る事が出来のに……。なのに。）

しかし彼女の瞳は……。

彼女が眠りにつく直前僕は、「ありがと」の言葉を聞いた気がした。

if 約束　くもうひとつの物語　2

「　！」

ガバッ！

はあはあはあ。

彼女の名前を呼び、僕は飛び起きた。

全身から冷や汗が流れ、体中の血液が逆流している様な感覚が支配する。

「ゆ…め？」

両手で顔を覆い、何とか冷静に成ろうとする。

しかし冷静に成ろうとすればするほど、鼓動は早くなり現実への恐怖が増してくる。

彼女！彼女は！！

昨夜共に眠りに着いたはずの彼女に視線を写した。

写した視線の先には、クイーンベッドに横たわり、薄手の掛け布団を肩を出した状態で掛けて眠っている彼女がいた。

僕が飛び起きたのにも気づかず、まるで死んでいるようによく眠っていた。

そう、まるで死んでいるように…

一瞬さっきの夢が頭を掠めた。

（彼女は本当に生きているのだろうか…）

僕は震える手で彼女の頬に触れた。

（暖かい…。）

ほっと安堵する。

自分の体の血液がやっと全身に回ってきたように思えた。

僕は、彼女の頬を髪を何度も撫で続けていた。

「う、うゝん」

彼女は眉に眉間を寄せ、唸るとうつすらと瞳を開けた。

「どうしたの？」

眠たそうに掠れた声で僕に言うと、ムクツと上半身を起こし、僕に寄り添って来た。

そんな彼女を自分の方へグイッと引っぱり、抱きしめた。

「きゃっ」っと軽い悲鳴を上げる。

始めは驚いていた彼女も次第に体を預け、僕が話すのをじっと待っていた。

少しの沈黙…

僕は瞳を閉じ、重たい口を開いた。「夢を見たんだ…。3年前の。」僕の言葉を聞くと彼女は預けていた体を僕から離し、心配そうに僕を見つめた。

そう…僕が見た夢…。

あれは、紛れもない現実だった。

3年前、彼女は事故に合った。僕が駆け寄って直ぐ、救急隊が到着し緊急搬送された。

意識不明の重体だったが、奇跡的に一命をとり止めた。

しかし、幾ら時が経っても彼女の瞳は開かなかった。

脳波には異常はないという医師。

僕は毎日彼女を見舞い、目覚めるのを待った。

彼女を見舞う度に、今日こそ目覚めてくれるという期待とこのまま深い眠りについてしまうのではないかという恐怖と戦っていた。

そして、1年後彼女は目を覚めました。

目覚めた彼女は、事故のショックからか軽い記憶障害を起こしていた。

事故にあうまでの半年分の記憶喪失を起こしていたのだ。

彼女が事故にあった経緯や眠っている間の事を説明すると始めはびっくりしていたが、日常生活には困らない程度で済んだとホッとしていた。

そして僕との再会と、プロポーズに涙を見せた。

それから彼女は厳しいリハビリを経て、僕たちは再会を約束した日に結婚した。

約束をしてから、8年もの歳月が経っていた。

「結婚した時に約束したでしょう？私は貴方の側にいるって。やっ
と一緒に慣れたんだもの、もう離れないわ。」

彼女はそう言うのと、いつの間にか僕の頬を伝う涙に唇付けを落と
し、僕を抱き締める。

暖かい彼女の温もり：

「ああ、そうだね。僕も約束したね。もう君を離さないって。」静
かに涙を流したまま、僕は彼女をきつく抱きしめた。

きっと僕は、これからあの悪夢を見るだろう。

そのたびに彼女を失う恐怖に怯えるかもしれない。今日の様に：
それでも、彼女と共に交わした約束がある。

この約束があるなら、どんな恐怖にも向かい合って行けるはずだと
信じている。

if 約束 くもうひとつの物語 く おまけ

ひいつく、ひいつく。ぐずぐず。

「さっ朔羅、どうしたの？」

入浴を済ませ、濡れた髪をスポーツタオルで拭きながらリビングに戻った京也。

そこで見たのは、ソファーにうつ伏せになりタオルを両手で顔に押し付けて泣く朔羅に声を掛ける。そして、朔羅足の空いたスペースに腰を掛けた。

「ふえーん、京ちゃーん」

ガバツ、ぎゅう

京也に声を掛けられると、朔羅は起き上がりギュウッと京也にしがみつき、本格的に泣き始めた。

京也は泣く朔羅を落ち着くまで慰めた。

「っで、どうして泣いていたの朔羅？」

落ち着いた朔羅に京也は問うた。

「この本読んでたら悲しくなっちゃって…」

朔羅が京也の前に差し出したのは、『約束』とタイトルの入った一冊の本だった。

「彼は4年後に迎えに来るって約束をしたけど、1年その約束が延びちゃうのね。っで、5年後約束をした場所へ向かうと…。彼女が事故に合ってしまったの。幸い奇跡的に助かったんだけど…。もし、これが私と京ちゃんだったらって思うと…ふえ」

また涙ぐむ朔羅。

「ばかだなあ、俺が朔羅を置いてどこか行くわけないだろ。もし行

くとしたら、絶対に朔羅も連れていく。」

そう言いながら京也は優しく朔羅に微笑み、そっと涙を指で拭った。

「この本、主人公もヒロインも名前が出てこないの。だから余計感情が入っちゃって：エヘヘ」

そう言って目尻に涙を浮かべながらも照れる朔羅が愛おしく、朔羅の頭を自分の肩に誘い撫でる。

緩やかな時間が流れる。

「でも、約束をしてから5年・再会してから3年。8年も一途に『彼女』を愛してた『彼』ってすごいよね。憧れちゃうなあ。」
ピクッ

「ねっ、京ちゃんもそう思わない？」

京也の顔を笑顔で覗き込む朔羅。

「朔羅…」

「うん。」

「どうやら俺は、例え本の中の人物でも朔羅が他の男の話をするのは気にくわないらしい！」

京也の台詞に京也の顔を覗き込んだまま固まる朔羅。

タラーっと汗が流れる。

「きよっ、きよっ京ちゃん。おっおっおっ落ち着いて。相手は架空の人物な「問答無用だよ朔羅！今日は寝かさないから。」

そう言うのと、ひょいっと朔羅を抱き上げ寝室に向っていった。

「わーん、どーしてえー。京ちゃんの、京ちゃんのばかぁ！」

こうして奏家には、朔羅の叫び声が響き渡りましたとさ。

if 約束　くもうひとつの物語　おまけ（後書き）

最後まで読んでいただき、ありがとうございました！

最後の最後まで、このおまけを掲載しようかどうか悩んでいた私でしたが、皆さんはいかがでしたでしょうか？

せして、このおまけに出てきた人物達：

読んでくださっている皆さんなら、もうお分かりですね？

そうです！「Honey×2」に出てくる二人です！

知らないという皆さんは、もし良ければ読んでみてください。　（ちやっかり宣伝してますね（苦笑））

ご意見・ご感想お待ちしております。

それでは、これからよろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3371n/>

i f 約束 ～もうひとつの物語～

2010年10月9日19時49分発行